

〈書評〉

三浦展著『「家族」と「幸福」の戦後史 ——郊外の夢と現実——』を読んで

——T君への手紙——

篠原三郎

一.

T君、おかわりありませんか。きみが外国に転勤されて出席できなくなった例の「現代経済研究会」、いまも変わらず、月1回のテンポでつづいております。

今回は、きみも関心のありそうな、三浦展氏の『「家族」と「幸福」の戦後史——郊外の夢と現実——』（講談社）という新書をテキストに取り上げましたので、それをめぐる「研究会」の様子を紹介したく一筆とりました。後日、きみの読後感でももらえれば幸いです。

T君、実は、前回の「研究会」では、「現代経済研究会」のそもそもの発起人であった知友の中本悟さんの長年の研究成果である『現代アメリカの通商政策』（有斐閣）が出版されたので、それを取り上げましたが、それまでのテキストと比べ、「研究会」の性格からいささか専門すぎたか、持て余し気味となってしまう、……そういう直後ということもあって、出席したメンバー、だれもがリラックスした雰囲気がありました。

T君、いや、それ以前に、「現代経済研究会」の事務局を担当している学生のAさんの書いた「研究会」の通知の文章には、「今回」は経済学から離れて社会学のテキストを取り上げることになったという断り書きのようなものがありました。その案内文の行間から滲んでくる雰囲気が、経済学とは違う非専門のテキストだということの強調とあいまって、いかにも長閑やかに感じられていたのです。

それはともあれ、ぼくが興味を覚えたのは、案内文が経済学と社会学を別個の世界のものとしてみている点なんです。

T君、きみもご存じのように、この「現代経済研究会」、名称からいかにも経済学の専門家集団から成り立っているようにみえますが、現在も会社員、公務員、司法書士、学生などなどからなる素人の（しかし、意欲のあるものの）、いわば勉強会です。もう10数年も継続していますが、

連絡・運営を担当している事務局は、いまま現役の学生が担当しています。学生は4年たてば卒業していくので、担当は長くても4年で交代していきますが、そのときどきの学生たちが大学キャンパスでどんな教育を受けているのか、かれらと接していると、ある程度想像できます。

ぼくなんかもそうでしたが、経済学と社会学とを分けて考える観念（この点、社会学との関係に限りません。哲学、政治学、経営学、言語学、教育学、あるいは、文学、等々との関係でも然りですが）が普通でしたし、いままそうなんですね。しかし、T君、それでいいのかという問題なんです。社会現象を考察していくとき、こういうように、いつまでも、なに学だ、なに学だ、……と分業化・専門化されていていいのだろうか、という問題です。もうずいぶん以前から学問体制の分業化・専門化の問題点が指摘され、学際的研究とか、異部門間の共同研究の重要性が主張されるなど、あるいは、それに関連して大学でのカリキュラムの改善、科目名の変更などがこころみられてきてはいるのですが、依然として実態は変わってきていないんですね。しかし、真摯に、それに疑問を感じているものもいます。

さきの中本悟さんの著書だって、氏が大阪市立大の経済研究所の所員ということだけで、単純に経済学書と位置づけられていく訳ですが、氏は、その著書で、ここでの方法はアメリカの通商政策のたんなる経済学的考察ではなく、経済過程と政治活動との関係・関連を重視し、政治経済学的分析であることを強調しているのです。それぞれの領域の研究のあり方も変わってきているのです。だいたい、経済だって、政治だって……だって、それぞれが単一次元に存在している訳ではありません。社会現象として絡み合っている訳ですね。ただ、そういう総体としての社会現象を機能的に分析していくための方法、ないし、制度として、研究の専門化が考えられていたのではないかと、思っているのですが、現実には、それぞれの研究が自立し始めると、相対的な自立的存在と考えられていたものが絶対的に自立して存在するものと思込まれ、たがいの専門性が確固たるものと主張され合うようになってきているのではないかと、思われるのです。全体としての社会的諸脈絡を見失っているという意味で、一種のフェティシズムなんです。そういう学問研究のあり方もそれなりに有効であるばあいもありますが、そうでないときもあります。とくに歴史として現代では、そうでないばあいが多いのではないかと、思うのです。（なぜ、そうなのかは、又、その社会的な原因を、ぼくがどのように考えているかは、拙稿〈篠原三郎・中村共一編著『市場社会の未来』（ミネルヴァ書房）の序章「現代資本主義の管理体制」〉を参照してください）。その意味でも、現代では、従来のような専門的、タコツボ的なパラダイムにたった研究のあり方は危機にさらされている時代状況にあると考えられるのです。社会学なんかは、そういう学問の危機を救うために比較的到新しく成立してきたものなのでしょうが、その社会学も、多くはそういう近代主義的な流れに従っているように思えてなりません。

ともあれ、T君、「現代経済研究会」の今回の案内状を読みながら、最近の「研究会」の雰囲気をお伝えしたく、いささか大風呂敷をひろげた話になったり、また、きみには百聞のことまで述べることとなり、煩わしいことでしょう。申し訳ありません。

T君、とにかく「研究会」がはじまる前から集まってきたメンバーから、つぎつぎ異口同音に

面白かった、面白い、といった言葉を何度もきいていたわけですが、三浦さんのテーマがメンバーのみんなにきわめて身近なものであったことが大いに関係があったのでしょう。

思えば、先の中本さんの著書は、同業研究者のあいだでは共通の学問的関心に直接迫られるものですが、学生を含めた一般社会人のメンバーからなるこの「研究会」ではそうはいかなかったのです。

しかしながら、T君、この面白い、面白くないといった問題は、研究者のあり方、生き方といった、実は簡単には済まされえない大きなテーマにまで関わっているのではないかと、「研究会」での発言や議論を通じて感じたのですが、後で触れたいと思っています。

二.

T君、ずいぶん回り道をしましたが、とにかく三浦さんの本、新書版という手軽さということだけでなく読みやすく、読みはじめると、つぎつぎページをめくりたくなります。ちなみに、目次は、八つの章からなって以下のようになっています。

- 第1章 マイホームという神話
- 第2章 ニューヨーク万博と郊外・家族
- 第3章 レヴィットタウンとアメリカの夢
- 第4章 冷たい戦争と暖かい家族
- 第5章 郊外への反乱
- 第6章 55年体制の中の郊外
- 第7章 郊外という問題
- 第8章 郊外を超えて

この目次にこの本のタイトルとサブタイトルを重ねてみると、著者がここでなにを述べようとしているのか、ある程度わかってきますね。郊外に向かって夢として追求された「家族」と「幸福」の現実がいかなるものであったかが、アメリカを前史として、また、それを追うように展開してきた日本の戦後を取り上げ、考察することによって解明されているのです。三浦さんは、自ら以下のように、「本書では、アメリカの1930年代から60年代、および日本の高度経済成長期から現在というように、60年間の歴史の流れの中に郊外を位置づけ、さらに郊外を政治、経済、消費、家族、女性、若者といった様々なテーマと関連づけて論じ」たものであると述べています。

さて、こうした著者は、T君、このように郊外を取り上げ、「郊外を論ずることは現代を論ずることであり、あるいは大衆と戦争と家族と消費の時代であった20世紀という時代を語ることにほかならないからである」と自らの問題意識を高らかに宣言されているんですね。

T君、この「……を論ずることは現代を論ずる」という研究者の姿勢というか、こういうセン

スに触れると感動しますね。いかなるテーマを取り上げようと、また、どのように論じようと、三浦さんのような気構えが感じられない研究は、いずれ三流の域を出ませんね。たんなる実務的知識か好事家的な研究にとどまることになりかねません。それは、それなりの意味も、実際上の意義もあるわけでしょうが、ぼくたちは、同時に、総体としての現代に生きているんで、全体に迫りうる観点から、いかなる問題をも、また、自分のことをも考えてみたいし、また、そういう思索のこころみは、いつの時代においても必要なことでしょう。というより、人間にとってのもっとも根源的な関心事ですね。このことは、上述した学問論とも共通していることと思われるのです。

T君、なお、三浦さんは、「あとがき」でこの著書を、「わが国初の郊外論であると自負」されている「四年前に出版した『「家族と郊外」の社会学』（PHP研究所）の改訂増補版にあたるもの」と位置づけています。ぼくは、残念ながら、その前著を読んでいないので、両者の比較はできないのですが、三浦さんは、この増補版では「歴史的な叙述を増やし、一方で現状分析と未来の予兆についてもかなり書き足している」とも述べているので、前著より充実した作品と受けとめていいのではないかと考えています。

こうみえてくると、T君、「研究会」のだれもが面白かったと、その読書感想を語っていたのは、たんに、この本が郊外という身近な問題を、あるいは、戦後史の日常の生活を具体的に取り上げていたからというだけでなく、郊外論を介して人間にとり根源的な総体としての現代を見詰め直させてくれたからではないでしょうか。

T君、著者の三浦さんは、本書の基調となる郊外と、それを形成している核「家族」は、「高度経済成長期の日本においていわば意図的につくりだされてきた一種の「装置」であり、「自然なものでもないし、伝統的なものでもない」、「きわめて特殊なものである」と理解されたうえで、このような「近代的な核家族の基礎」は、古くは大正時代につくられ、「モダニズムと家族とが結びつき、近代的な核家族」として理想化されるようになってきたのであるが、それが、「戦後、大衆消費社会の発達の中で、経済的な豊かさや物質的な欲望を実現する単位としての家族という、それまでにはなかった新しい家族のイメージ（団地族やニューファミリー）」となって一挙に普及していったものと説明されています。

このように読んできただけでも、T君、興味がかきたてられ、どんどん行を追って読みたくなってきました。

「家を買ひ、ファミリーカーを買ひ、家電を買ひ、ファミリーレストランに行く家族」、「戦後の核家族とは大量生産された家族なのだ」、「それまでの伝統的な地域社会から離脱して、核家族という不安定な存在となった戦後の家族を、まとめあげ、凝集させる役割を担ったのが消費なのだ」、「生活がどんどん豊かになっていくことを実感し、幸福感を共有することで、根なし草の核家族は丸となることができたのである」……と。

こうおさえてきたうえで、T君、三浦さんは、こんにちの家族とはいったい何なのか、と改めて問題を投げ掛けられ、「なぜ家族は大量生産されたのか。なぜ大量生産される必要があったの

か」という高みから、この問題を歴史的に遡りながら解明していくんです。

こうして、T君、三浦さんは、さきに引用しておいたように、「問題」が歴史的に展開されるアメリカの1930年代から60年代までと、日本の高度経済成長期から現在までを追跡し、前者の歴史が後者の形成に大きな影響をあたえ、「絶対的な力」をふるったものと見定め、本書は、前述の目次のように語られていったのです。

T君、思えば、20世紀資本主義は、まさに大量生産体制の形成、それにともなう大量消費社会の成立を実現してきた歴史ですね。その間、2回の世界大戦があり、ロシア革命・社会主義体制の確立・崩壊という歴史的な大事件を体験してきたのですが、そういう歴史の大きな流れと事件を背景に、また、それと関わらせて、三浦さんは、アメリカ人の「家族」と「幸福」が「郊外の夢と現実」のなかで、いかに追求されてきたのかを述べていくのです。第1章から第5章までの所説は、それです。そのナラティブが、その折々の映画やテレビ、雑誌などでの話題を介してすすめられていくこともあって、ますます身近に感じられ、なんともいうように面白く、……ぼくの紹介よりも、まず読んでください。他国のことには思えませんね。同時に、その郊外論とかかわって改めているいろんなことを知る楽しみもありました。たとえば、1939年に開催されたニューヨーク万博の歴史的意味、冷戦時代の家族形成の政治的意味、等々、こういうこともあったのかと、寡聞なぼくなど、さまざまなことを教わりました。

しかしながら、T君、アメリカの郊外史を取り上げたあれこれのところで、一番興味を引きつけられた章は、やはり、第5章の「郊外の反乱」ですね。また、著者が郊外論でもっとも良かったことも、この辺りにあるのではないのでしょうか。こうはじまります。

「戦後のアメリカの家族は、冷戦時代における「兵器」として大量に生産され、宣伝され、欲望され、消費されたイデオロギーとしての側面を色濃く持っている。したがって当然のことながら、家族、そして家族の主な舞台である郊外は、単に家族の成員一人一人にとって安息の場であったというよりも、むしろ彼らをひとつの型にはめ、型にはまらない者を逸脱者と見なす機能を持つことになった。

女性も、若者も、1950年代の郊外中流家庭の中では、一見世界で一番豊かで幸福そうでありながら、実はしばしばひどく抑圧された存在だった。もちろん、黒人などマイノリティの人種の人々は郊外中流生活の恩恵は受けられなかった。また、環境問題や自動車問題などは、まるで存在しないかのように思われていた。

しかし1960年代になると、それらの抑圧されていた人々が郊外の問題に気がつきはじめた。

こうして、1950年代への批判がさまざまな立場から火を噴きはじめたのであると述べます。郊外の主婦の問題を描いた、いまはフェミニズムの古典ともなっているベティ・フリーダンの『女らしさの神話』の出版、あるいは、農業の濫用を批判したレーチェル・カーソンの、今日、誰にも知られている『沈黙の春』の刊行、かの有名なマーチン・ルーサー・キング牧師らの黒人の人権を訴えるワシントン大行進、ラルフ・ネーダーのクルマ社会批判などが紹介されています。とりわけ、郊外生活への不満を募らせたのは、中流家庭の平均的で退屈な「幸福」の中に主婦と

して押し込められた女性たちと、「親と同じか、できれば親以上の学歴と地位」を求めるしかない、画一的な生き方が期待される若者たちであります。「郊外への反乱」は起こるべくして起きたのですね。もう他人事ではありません。

T君、結局、ひたすら郊外へ求めてきたアメリカ人の夢は、達せられるや、「郊外への反乱」という現実につかかっていったようです。

三.

しかるに、T君、「戦後、貧しさの底にあった日本は、1950年代のアメリカという……「豊かな社会」を理想として追い求めるのです。この著書のメインとおもわれる後半が郊外の日本の戦後史として具体的に展開されていくのです。アメリカの郊外史を読んでいるときも、他国のこととは思われなかったのですが、この戦後史は、直接ぼくら自身が体験してきた生活史です。ここでは改めて紹介しませんが、読みながら、一行一行が実感として蘇ってくるんです。そして、日本も、アメリカと数十年の時間差があったものの、同じような「家族」と「幸福」の夢を追い求める歴史の歩みを郊外形成というかたちで辿ってきたのだという自己認識をしました。人間は、歴史の教訓を学ばないんですね。

T君、ご存じのように、このような郊外問題や家族問題に関しては、宮台真司著『まぼろしの郊外』（朝日新聞社）や、上野千鶴子著『近代家族の成立と終焉』（岩波書店）などがありますが、アメリカ史のそれに引きつけて考察されている点、三浦さんの研究の特徴ですね。その結果、家族をめぐる郊外のそのような歴史は、それぞれの国での特殊性こそもちろんあるものの、大衆消費社会を実現してきた20世紀資本主義にみられる普遍的な傾向でもあるようにみえてくるのです。それゆえ、今日に生きているぼくらにとっての問題は、アメリカでみた「郊外への反乱」、あるいは、同じように日本において近年、郊外で頻発する青少年犯罪問題などとして現われている「郊外という問題」を、どのように克服していくか、ということですね。

実際、「研究会」でも、この辺りにかかわる発言が多かったんです。しかし、どちらかというと、仕事をもって働いている社会人は、この問題を深刻に受けとめてはいましたが、若い学生たちの方は、意外に、平然と見ていたように感じられました。学生は、自分たちの親が苦勞して追い掛けてきた夢がいかなるものであるか、その実態に気づき、それを醒めた目で見ていたからなのでしょうか。そんな印象をもちました。

ともあれ、T君、三浦さんは、こうした近代の「家族と郊外」は、結局、「政治化され、工業化され、商業化されて、大量生産され、そして、むしろそこに住む家族を規制し、束縛し、とめどなく消費させ欲望させる装置へと変わっていったのではないかと、結んでいるのです。

したがって、このような郊外問題を解決していくためには、当然のこと、それまでの価値観の再検討、つまり、郊外家族のうちに典型的に流れている、土地、家、自動車、家電、家具、個室といったものの「私有」、地位の上昇といったものを追求していく大衆消費社会の価値観とその

生活スタイルの拒否こそが期待されるのではないかと、近年の若者の行動の中に現われている、いわゆるフリマ的生き方の事例を具体的に紹介しつつ、三浦さんは、その考え方を提示されるのです。

四.

T君、上述のような三浦さんの提示にも、興味と共感を覚えつつ、ぼくは著書を読み終えたのですが、それゆえにも、以下のような問題を、著者はどのように思われているのか尋ねたくなりました。

郊外も家族も、思えば、指摘されてきたように、大量消費の「装置」のために形成されたものとすれば、消費のまえに生産があるはずで、三浦さんも大量生産ということを現代社会の特徴としても絶えず強調されてきたようで、また、それを踏まえ、「郊外とは、工業製品化され、大量生産された街である」という視点から問題を考察されていたようにも受けとめているのですが、その意味でも、大量消費と大量消費社会を形成せざるをえなかった現代資本主義における大量生産体制の問題と、その歴史的意味の分析にまで論及の幅を広げてもらいたく思いました。そもそも郊外問題を生みだしてきた原因は、その生産体制にあったのではないか、ということなのです。大量生産を主として担当してきた大資本・大企業は、「家族」の「幸福」を直接の目的に経営活動をしているわけではありませんから。

そうであれば、T君、フリマ的な価値観が若者の世界にとどまらず、社会全体に広く浸透し、多くの人々がそのようなにも実際に生きていけるようにするためには、他方で、現代資本主義のこれまでの生産体制とそのあり方の変革が、決して容易なことではありませんが、積極的に求められていかねばならないのではないのでしょうか。近代的価値観を形成し、再生産してきた社会的条件を変えていく必要があるのではないか、ということです。この問題を不問にしたのでは、著者の考え方の折角の提示も不十分になるように思えてならないからなのです。（この問題に関連して、たとえば、働く人々の労働時間の短縮、男女共同参画を文字通り社会的に実質化していく、郊外に新しい共同体社会を創造していく、などといった意見も「研究会」ではでていました）

T君、「研究会」では、戦後日本の「家族と郊外」問題の乗り超えをめぐる三浦さんの見通しに、学生も社会人も含め、ほとんどのメンバーが特別異議を述べてはいなかったものの、しかし、フリマ的価値観のような新しい価値観がやがて広く定着していくだろう、とは誰も信じなかったのも、その辺りの分析不足がたたって具体的な説得性をもちえなかったのかも知れません。このことに関しては、先に上げた宮台氏の著書でも、狭い意味での、いわゆる社会学の世界にとどまっているようで、あるいは、価値観・価値感やそれにもとづく行動やその現象の変化・変容の考察レベルの研究にとどまっていて、同じような不安を感じていたのですが、三浦さんの考察は、宮台氏のそれより広く大量消費・大量生産の社会の進展を展望して行なわれていたがゆえにも期待したかったのです。

アメリカの1950年代に、さまざまな社会問題がいっせいに噴出してきたと三浦さんが列挙されていた、黒人問題、環境問題、ジェンダー問題、学生問題などのどの問題も、原因を、社会学だ、政治学だ、経済学だ、などといった学問上の近代的価値観に裏づけられた領域観を越えて追求していけば、現代資本主義の生産体制の本質にまで深く関わっていくのではないかと考えられてなりません。(こうなれば、これまでの社会学のあり方も変わってきているでしょう。文字通り、脱近代です)。そうなれば、郊外を論ずることは現代を論ずることであると取り組まれた三浦さんの主張は、より深く現代の本質を現実的に突くことにもなっていたのではないかと、思われてくるのです。

その意味でか、郊外で青少年犯罪が頻発しているという記述に対して「研究会」の女子学生がその原因を郊外にのみ求めていくことに不満をのべ、都市の中でも犯罪は起きているし、その原因も多様であるはずだと指摘していましたが、その彼女のテキストの読み方にも問題がありますけれど、本書の中にもそう感じさせる一因もあったのではないかと考えています。

ともあれ、T君、三浦展さんのこの著書は、現代に生きるぼくらの生活の歴史的位置とその社会的意味をいろいろ考えさせてくれ、興味深く、面白く、多くの知人、友人にすすめているんです。ここまで書いてくると、強制するようですが、ぜひ、きみの感想を、ぼくの読み方に対する意見をも含めてきかせてください。

追伸 なお、次回の「現代経済研究会」のテキストは、本文でのような関心から、山田昌弘著『パラサイト・シングルの時代』(ちくま書房)、海老坂武著『新・シングルライフ』(集英社)を選びましたので、お伝えしておきます。

(2000年4月3日、記)